

肥前名護屋城の数寄空間 —特別史跡 名護屋城跡と陣屋跡の庭園—

松尾 法博（基山町教育委員会）

The Space for Tea at the Hizen Nagoya Castle:
Gardens at the Nagoya Castle Remains and the Encampment Sites (Special Historic Sites)
MATSUO Norihiro (Kiyama town Board of Education)

1. 発掘された数寄空間 —数寄屋と能舞台

(1) 堀秀治陣跡「数寄屋」・「能舞台」遺構の発見

佐賀県教育委員会では、昭和51年度から「名護屋城跡並びに陣跡保存整備事業」を開始し、まず、残存状況の良い豊臣秀保陣跡から着手、その次に堀秀治陣跡を対象とする。堀秀治陣跡では、発掘調査を実施したほぼ全域について、保存整備まで実施している。一つの陣跡のほぼ全容を解明するという発掘調査は他に前例がなく、その規模の大きさや確認した遺構の様々な内容からみても大変貴重な事例となっている。その対象面積は約10haに及び、昭和56年度に開始し、平成4年度の終了まで11年を要している。

保存整備は、主に本曲輪および北西曲輪の主郭部を中心に実施し、特に、昭和58年度の本曲輪の内容確認のための発掘調査では、数寄屋跡や日本最古級の能舞

台跡と考えられる遺構を確認している。これら発見された能舞台跡ほかの遺構については、現在、保存のために埋め戻されているが、その規模や形状は、現地での「平面表示」による整備や説明板等で示している。

(2) 名護屋城跡「草庵茶室」の発見

平成8～9年度、平成16年度には、名護屋城跡山里丸において、天下人豊臣秀吉の「草庵茶室」跡とその露地と考えられる空間を発掘調査で確認した（図1）。「肥前名護屋城図屏風」（図2）には数寄屋と思われる茅葺屋根の建物が描かれ、それは博多の商人神谷宗湛が記した数寄屋での描写（『宗湛日記』）と照合される発見として注目されている¹⁾。

2. 肥前名護屋城とその時代

名護屋城跡並びに陣跡は、豊臣秀吉による明国及び朝鮮半島侵略の野望の下に築かれた城であり、大陸出兵の基地となった城である。豊臣秀吉の出兵は、朝鮮半島に深刻な被害を与え、明治以降の日本による朝鮮半島の植民地化・侵略の事実と相まって、今日なお、両国の交流の歴史を考える際、欠くことができないものである。

城跡群は、「肥前名護屋」（現在の佐賀県唐津市鎮西町名護屋）の地にあって、その歴史的意味を直接現代に訴える生きた証拠ともいえる史跡となっている。さらに、城の絶対年代が明確である点で遺跡の年代を決める基準となることや、織豊政権から幕藩体制への移行を研究する上で重要な情報をもっていることが指摘されている。名護屋城跡並びに陣跡は、全国を統一した天下人豊臣秀吉が、わずか1年1ヶ月の短期間とはい



図1 名護屋城跡周辺（航空写真、南から）

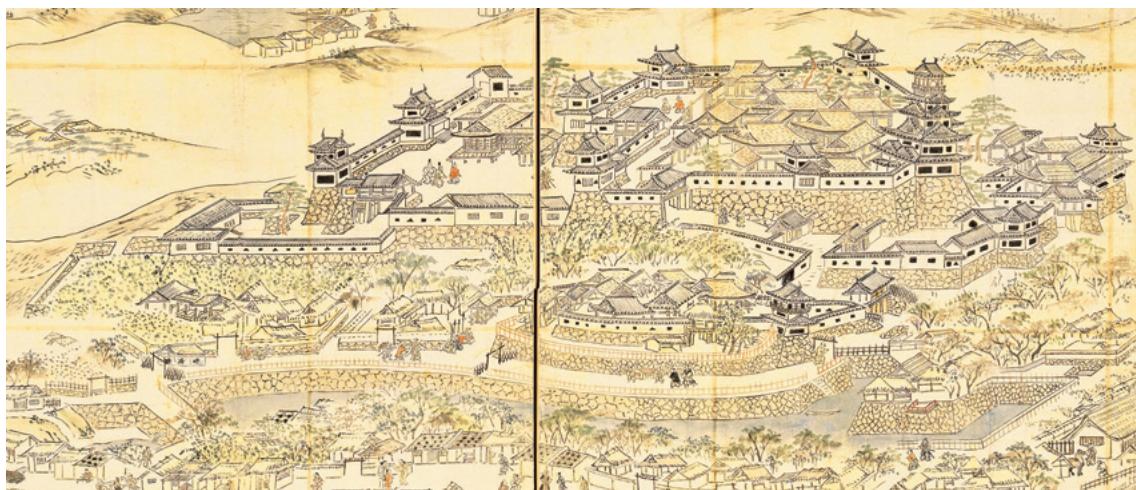


図2 「佐賀県重要文化財 肥前名護屋城図屏風（部分）」佐賀県立名護屋城博物館蔵



図3 特別史跡 名護屋城跡（北から：「肥前名護屋城図屏風」と同じアングルで撮影）

え、肥前名護屋城に在城し、そこから全国の諸大名に号令した日本史上に残る重要な城である。また、秀吉の命により徳川家康、前田利家、上杉景勝、石田三成、伊達政宗など、全国の諸大名が集結させられ、各自が陣屋を構築し、長期滞在をしたことは、九州の一地方である「肥前名護屋」の地を一気に我国の政治上の中核地に押し上げるという、日本史上類を見ない特異な状況を生み出した。さらに秀吉の死によって突如その役割を終えて、廃絶された城や陣屋・城下町の遺構は広範囲に点在することになった。それは、全国各地の近世城郭の大多数が江戸時代に改変を受けている中で、近世初期の城郭の姿をよく残す、極めて貴重な例

となっている。名護屋城跡並びに陣跡は考古・文献・建築史等多岐にわたる学術的価値を有する遺跡として大正15年（1926）に史蹟に指定され、さらに昭和30年（1955）には遺構の遺存度が良好なものも多く、城郭建築史上学術的価値が極めて高いことから、史跡のうち学術上の価値が特に高く我が国文化の象徴たるものとして国指定の特別史跡になっている。

現在、名護屋城跡の約17ha、陣屋群のうち23箇所56ha、合計73haが特別史跡に指定されている。しかしながら、諸大名の陣屋跡は名護屋城跡を中心に半径3kmの圏内に130余が点在することが確認されているが、そのうち徳川家康陣跡・前田利家陣跡・堀秀治

陣跡など23の陣跡が特別史跡に指定されているに過ぎず、大半は未指定のまま雑木林等のなかに埋もれた状態で良好に保存されている（図3・図14・表3）。

1) 肥前名護屋城の築城の経過

名護屋城は、肥後（人吉）相良長毎宛、石田正澄書状（天正十九年八月二十三日）に「来年三月朔日ニ、唐ヘ可被乱入旨候、各も御出陣御用意尤候、なこや、御座所御普請、黒田甲斐守（長政）・小西摂津守（行長）、加藤主計（清正）被仰出候」。また、「黒田家譜」によれば、天正十九年十月に「其繩張を（黒田）孝高に命ぜられ、孝高地わりを定めらる。惣奉行ハ長政に仰付られ、十月より斧始めあり。来年二月に營作成就す。」とあり、天正19年（1591）の後半には、黒田孝高が繩張りを行い、九州の諸大名の手伝い普請により、石垣普請と天守、本丸の主な殿舎の作事など名護屋城の築城が進められていたと考えられている。そして、豊臣秀吉が天正20年（1592）4月25日には名護屋に到着したことから、それまでに城の主要部分が極めて短期間に完成していたと推測される。

平成6年から進めている名護屋城跡の基礎発掘調査で、本丸、三ノ丸、馬場、弾正丸などについては、城の増・改築が行われてきたことが明らかになり、わずか7年余の極めて短期間であっても城の大改造が行われていたと考えられる。また、『宗湛日記』の「山里の座敷開き」の記述等から、山里丸も秀吉着陣後の工事で完成したものと考えられている²⁾。

豊臣秀吉は、慶長3年（1598）8月18日に亡くなるが、名護屋城も秀吉の死とともにその役割を終えたと考えられている。その後、唐津城築城の際、名護屋城の用材を用いたと言われ、また、一国一城令や島原の乱の際に名護屋城を破却したと伝えられているが、その実態はまだ明らかにされていない。現在は、崩壊した石垣が城内の各所に認められ、それは一定の規則性をもって「V」字形に欠落し、転落した石垣の石材や裏込石が「ハ」字形に堆積している。このような歴史的な景観が、現在に至るまでの長い期間、良好に保存されてきている。

2) 陣屋の築城

諸将の陣跡は名護屋城を中心とし、現在、約130箇所が確認されている。その多くは、名護屋城跡周辺に

立地するが、他に東側対岸の丘陵や南側の後背丘陵にもいくらかを確認することができ、最も離れた陣跡は名護屋城跡から約3kmもの距離にある。各陣跡の残存状況は、一部に谷地形の区域に比定されているものもあるが、ほとんどが半島の中に点在する丘陵の高所となる地形を選定し、その最も高い地点を中心として各々の陣屋を築いている。しかし、その陣屋の縄張りは、名護屋城ほどの近世城郭の体裁を成すものはなく、空堀・土塁・石塁等の配置や規模からみて「陣屋」と称されるほどの構えでしかない。名護屋城築城に際して、九州の諸大名がその周辺に陣を構えていたこと、他の大名衆も秀吉の到着前には名護屋に参陣していたことが推定されている。諸大名の陣屋の配置については、現在では、江戸時代末期に制作された「配陣図」や「陣屋に関する覚書」・「所伝」などの資料と各陣跡の分布状況との比較検討から、中村質氏がその問題に対しての比定を唯一行っているだけである³⁾。その比定については、陣替えの可能性もあり、氏自身も述べられているように検討すべき課題も多く含まれている。

3. 堀秀治陣の数寄空間

堀秀治は越前北の庄（現在の福井県福井市）を治める約18万石の大名で、文禄・慶長の役には約6,000人の兵を率いて16歳の若さで参陣し、渡海せず、留守部隊であった。堀秀治陣跡は、名護屋城跡の南500mに位置する。入会地であったため、発掘調査前から礎石等が一部露出するなど保存状態がよい陣跡であり、陣の全容解明が期待された陣跡の一つであった。発掘調査では能舞台遺構など、予想を上回る保存状態が良好で重要な遺構が確認され、また、丘陵の麓から頂部までの丘陵全域が陣として利用されていたことが明らかになっている。陣跡は約10万m²の丘陵全域に広がり、丘陵頂部の本曲輪を中心に、北曲輪・北西曲輪・西曲輪・東曲輪などが丘陵に配置されている。堀秀治陣跡の本曲輪には、名護屋城側から（北から）登る大手道が通じており、石段や門跡、玉石敷きなどの遺構が確認されている（図4④）。さらに本曲輪の内部には広間や御殿と考えられる礎石建物跡のほか、能舞台跡・数寄屋跡・飛石・手水鉢などの遺構がある。本曲輪では、



図4 堀秀治陣跡 配置図、調査状況等

「公的空間」と「私的空间」の利用区分が考えられており、当時の上層社会の実生活が営まれた空間構造を垣間見ることができる。一方、本曲輪から二つの堀切で隔てられた北西曲輪では、石垣で曲輪を構成する特色がみられる。北西曲輪の頂部や東曲輪にも飛石などが確認され、陣跡全体が防御機能を有しながらも、遊興空間的な要素を併せもつ堀秀治陣跡の特殊性も見ることができる。

(1) 本曲輪の遺構の概要

本曲輪は、丘陵の自然地形を大きく変えることなく、そこに土壘や空堀を巡らせている。大手は曲輪の北東隅に配置され、曲輪全体は南へ広がっており、ほぼ半円形をなす（図4④）。中央部には、2棟の礎石建物跡が東西に配置されている。曲輪の中心となる施設で「御殿」と考えられる、東側の建物跡（SB001）は、本曲輪大手門から続く立派な石段（（SX033）に近い位置にある。

一方、西側の建物跡（SB002）は、それから10m離れているが、東側の建物跡（SB001）とほぼ並行して建てられている。

東側の建物跡（SB001）は東西6間、南北4間の主屋（身舎）に1間の縁を四方に廻らせるものである。残存する礎石の配置から、西側の建物跡（SB002）と異なっており総柱とは考えにくい状況である。

西側の建物跡（SB002）は東西6間、南北10間の建物の西端に、さらに東西4間、南北5間分を延ばして矩折の主屋構造をなしており、その周囲には、1間の縁を全体に廻らせている。基礎構造は礎石による総柱であり、重厚な趣をもつ建物が想定される。

北側にSB003～005建物跡とそれに係る敷石遺構が見られるほか、東側にSX022敷石遺構、西側にSX025敷石遺構、そして南側にSX023・024の各敷石遺構や離れてSB006・007建物跡が配置されている。

SB002と対面する形で、1棟の礎石建物（SB003）が見られ、北西隅に斜めに走る細長い建物（SB004）を付設しており、他の建物跡と配置が異なる。さらに西側にはこの建物群とやや離れて1棟の礎石建物跡（SB005）が建てられている。つまり、中心となる建物（SB002）の前面にこれら3棟の建物跡が一つの計画性をもって配置されているようである（図4①③）。

曲輪の南側では、飛石遺構の最終地点にそれぞれ礎石建物跡（SB006・007）が配置されている。

SB006建物跡の桁行方向は良好に残存しており、桁行3.68m、4間が考えられる。梁行は2.76mで、柱間は不明。西側に飛石遺構が続いている。

SB007建物跡では、2～3個の石を確認している。SX031飛石遺構がSB006建物跡に至るSX030飛石遺構と別れてこの付近まで延びており、SB006と同程度の建物跡を想定している。

飛石群は、搦手から曲輪の南側を回る土壘の走りに合わせるように、緩やかに南方向へ曲がりながら続いている。その途中には御手水鉢⁴⁾と考えられる大石が据えられている（図4⑤）。

(2) 本曲輪内の数寄空間

建物群の構造（広間・中門廊などの配置）から見ると堀秀治陣屋は、「御成り」を受けるに値する格式をもつものであり、記録は全く残っていないものの、豊臣秀吉が実際に訪れたことも十分に想像される。

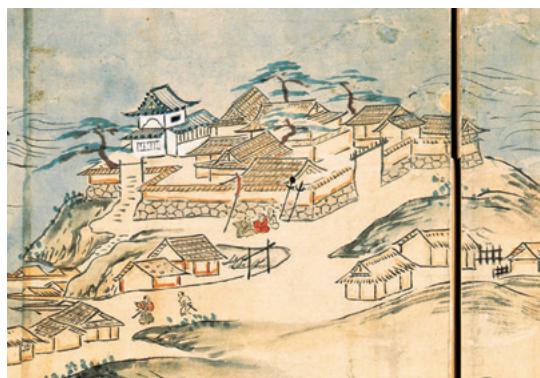
主郭内部においては、確認された礎石や玉石敷き、飛石の分布状況から、中央の2棟（「広間」「御殿」）を中心とし、南北両側の区域に整然として展開している。「中門廊」を備えたSB001建物（「広間」）は「公的な空間」で、その奥のSB002建物（「御殿」）は「私的な空間」として見なされている。その私的な「御殿」の北側前面には、能舞台・蹴鞠場（か）の空間を、南側裏手側には、路地を含めた数寄空間を想定することができる（図4③）。

この堀秀治陣跡では、「能」や「茶の湯」の施設が広間などの「公的な空間」ではなく、本曲輪の奥の「私的な空間」に配置されているところに特色がある。また、北西曲輪は、飛石群が縦横に廻らされ、遊興的な施設の存在が窺える。

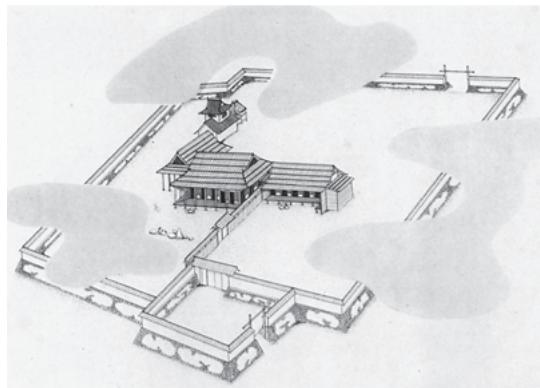
これまで調査された豊臣秀保陣跡・古田織部陣跡・木下延俊陣跡・後田遺跡の事例でも、遊興的空间の存在が指摘されており、さらに堀秀治陣跡における面的な発掘調査の成果は、上層社会の実生活が営まれた空間構造や陣屋構造を考える際の重要な資料を提供している。



①陣跡遠景（北から）



②肥前名護屋城図屏風（部分）



③主郭復原図（北野隆氏復原）



④遺構配置図（主郭）

図5 豊臣秀保陣跡 配置図、絵図等

4. 諸将陣屋の数寄空間

(1) 豊臣秀保陣跡

豊臣秀保（1579～1595）は、秀吉の姉である日秀（瑞竜院）を母にもち、秀吉の甥にあたる。天正20（1592）年には従三位権中納言となり、「大和中納言」と呼ばれるようになり、文禄・慶長の役に際しては、後見人である藤堂高虎とともに、一万人を率いて肥前名護屋に在陣している。豊臣秀保陣跡は、名護屋城の南西に

ある串浦に面する標高約68mの地元で「鉢畠」^{はちばたけ}と呼ばれる丘陵上に位置する（図5①）。丘陵の南側には名護屋城から串浦を結ぶ「串道」が通り、要衝を占めていた。昭和53年から3か年にわたる発掘調査によって、第一陣の主郭を中心とした陣跡の構造が明らかとなつた（図5④）。主郭で確認された礎石建物群は、主殿や遠侍、御座の間、数寄屋などを備えた御殿建築であつたと考えられ、その北側には景石を配し、玉石を敷き詰めた庭園遺構が確認されるなど、桃山時代の武家屋



①調査区全景（西から）



②曲輪 II周辺



③曲輪 II石段②(北から)



④通路跡の飛石（北から）

図6 古田織部陣跡 調査状況

敷の様子を知る貴重な資料となっている（図5②③）。

また、周囲を取り囲む石壘は、最大で高さが約2.5mにも及び、枱形内部には巨大な鏡石を複数配置するなど、当時の石垣構築技術の高さを見ることができる。

豊臣秀保陣跡では、石壘の補修を行うとともに、遺構保護のための盛土を施し、発掘調査で検出された礎石建物群を擬似礎石を用いて平面表示を行っている。

(2) 古田織部陣跡

古田織部陣跡は名護屋城跡から南へ約500mの位置にあり、平成2・3年度に実施された曲輪I・IIの発

掘調査では掘立建物跡、柱穴列（堀跡か）、土壙、溝跡、玉砂利敷きなどのほか、虎口に伴う石段や通路跡が発見された（図6①②）。特に通路は、丸みのある自然石を飛石状に並べるもので、また、曲輪に入る「虎口」の石段の踏み石も飛石状の自然石を用いた、他の陣跡ではみられない特徴的なものである（図6③④）。そのほか、曲輪I内の各所では玉石敷きも発見されている。

(3) 木下延俊陣跡

木下延俊は、秀吉の正室おねの兄木下家定の子。名



①陣跡全景

②雪隠遺構



③主郭の飛石

図7 木下延俊陣跡 調査状況、現況

護屋城跡に隣接し、山頂部の平坦地は周囲を高さ1～1.5mの石壘に囲まれた主郭で、平成4・5年度に実施された発掘調査では、南西側に内部に玉石が敷き詰められた、大手と思われる内枠形の虎口が、また反対の北東側では搦手の喰い違い虎口が発見されている（図7）。また、そこから岩盤の間をぬうように続く飛石列、仏堂や数寄屋かと推定される小型礎石建物、「雪隠」と思われる石組遺構などが発見され、主郭内部に「数寄空間」の露地が広がっていることが明らかとなつた。その他、岩盤の露頭では、陣屋を構築する際、岩盤を割りとて整形したことを窺わせる、「矢穴」の痕跡が残る箇所がみられる。

（4）徳川家康陣跡（別陣）

呼子町の北西部、通称“馬場山”と呼ばれる丘陵に位置し、徳川家康の軍勢1万5千人がいたと推定される陣跡（図8①）。標高46.5mの丘陵上に位置し、陣跡の広さ東西200m×南北380m以上で、前田利家陣跡と並び、陣跡の中では最大規模である。陣跡は、大きく南北2つの曲輪から成り立ち、南側の曲輪は、東西75m×南北120mの規模で、周囲を高さ1m～1.5mの土壘や石壘が巡り、北側には空堀が見られる。北側の曲輪は東西25m×南北75mを測り、周囲には石壘



①肥前名護屋城図屏風（部分）



②SR01 玉石敷通路跡（東より）

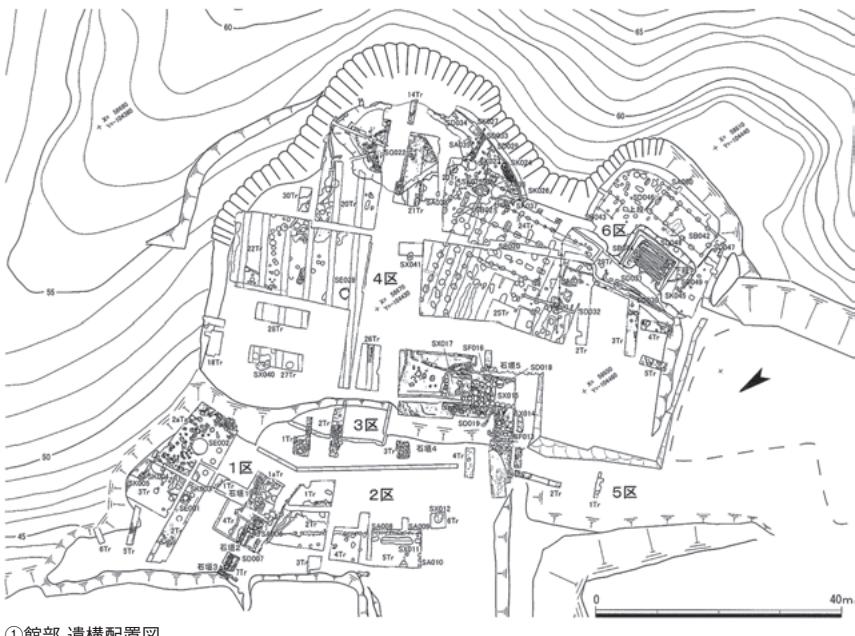
図8 徳川家康陣跡（別陣） 絵図、調査状況

が巡り、北側の丘陵先端部には櫓台と想定される高まり（マウンド）がある。

この徳川家康陣跡（別陣）では、平成3年～10年まで発掘調査を実施し、南側の曲輪からは、高さ1.5mの土壘と空堀、3棟の掘立柱建物跡（うち1棟は、3.65m×18.25mの長屋）と小規模な礎石建物跡等を検出した。北側の曲輪では、掘立柱建物跡の他に数寄屋跡と思われる礎石建物跡や露地を発見している（図8②）。櫓台跡では、マウンドの上部に柱穴があり、掘立柱の櫓があったことが推定されている。

（5）前田利家陣跡

陣屋は名護屋城に近接しており、標高79mの頂上部を含む、広さ10万m²に及ぶ最大級の大きさを誇る。陣屋は山上の曲輪群と山裾にある居館部分の曲輪に分かれており、居館部分は高さ6mの石垣からなる内枠形の虎口を入口としている。平成12～18年度にかけて発掘調査が実施され、御殿の一部と思われる平面L字形の大型掘立柱建物跡や雪隠跡、直径20m以上の



①館部 遺構配置図



②肥前名護屋城図屏風（部分）



③「館部」の池泉跡（西から）

図9 前田利家陣跡 調査状況、絵図

園池の跡など、明国使節の接待にも使われたと推定される、格式のある利家の居館の様子が明らかとなった（図9①）。また、天正20（1592）年11月5日に利家が秀吉を陣屋に招いたことが伝えられており、秀吉はその応接への礼状で、露地や数寄の出来栄えを称えている⁵⁾（図9②）。

曲輪の内部は、大型掘立柱建物や蔵跡などが見つかった南側の居住空間と、園池や雪隠などを含んだ北側の数寄空間に分かれるなど、「館部」内部の空間利用の様子も明らかになった。

「館部」の最も奥まった場所、丁度、山上から水が流れ込む付近に、東西約23m、南北約16m、深さ最大1.8mに及ぶ、平面橢円形の池が発見された。池は当初大きく岩盤まで掘られ、一定期間を空けた後、新たに内部に石垣を築いてテラスを設けて2段に改造され、さらにテラス部分では飛石が並べてあった。数寄空間を構成する庭園の池泉であるとともに、雨水が多い際の調整池を兼ねていたものと推定されている（図9③）。

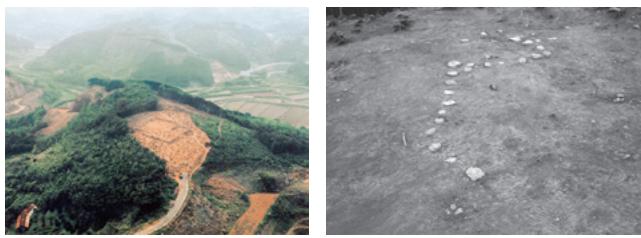
（6）木村重隆陣跡

名護屋城跡の南西600mの小丘陵に位置し、江戸時代末に書かれた「秀吉公名護屋御陳之図二相添候覚



図10 木村重隆陣跡 雪隠遺構

書」には、「三千五百騎 木村常陸之助（常陸助）池之寄」とあり「池ノ峰」、地元では「池ノ山」と呼ばれる場所にある。周辺には、片桐且元、木下勝俊、堀秀治、南部信直、日根野高弘、加藤清正など秀吉子飼いの大名達の陣跡に囲まれ、最高所は標高56mを測り、陣屋の総面積は約2万m²に及ぶ。この陣跡は大きな曲輪1を中心に、北側にやや大きな曲輪（曲輪2・3）を配置している。平成2・3年度に鎮西町教育委員会が行った発掘調査では、曲輪、石垣、土塁、石列、集石遺構、雑壇状遺構、雪隠遺構、石取場跡を確認して



①全景 ②主郭内部の飛石遺構

図11 後田遺跡

いる。雪隠遺構（図10）は、曲輪の隅部分、石塁に近接して作られている。1間×2間の覆屋の内部には親指大の玉石敷きがあり、飛石は約0.5m間隔である。

(7) 後田遺跡 (No.120陣跡)

陣主不明の陣跡。名護屋城跡から遠い位置にあり、陣の中心部は平面形が方形プランをなし、石垣ではなく土塁で囲まれている。その内部の南側では、飛石・玉砂利敷等の遺構が確認されている（図11）。

5. 肥前名護屋城の数寄空間 —秀吉と数寄と能—

(1) 山里丸

山里丸は、秀吉の名護屋城滞在中における御座所として造営された居館区域で、気候が悪い冬の時期には北西の季節風が強く吹き付けるため、本丸から下って日常の生活を送ったと伝わる。大きく3区画に分けられ、東側の2区画を「下山里丸」、西側の1区画を「上山里丸」と呼ばれている（図12④）。「肥前名護屋城図屏風」では、下山里丸の東端には能舞台とその橋掛や樂屋の空間があり、上山里丸は2段の石垣で囲まれており、東側には櫓門、内部は柿葺きの建物、北西の隅には重層の瓦葺建物（月見櫓）、その奥には藁葺きの屋根が描かれている（図12①）。

上山里丸には、東側と北側に虎口がある。東西約100m、南北60～80mのほぼ平坦な区画があり、その奥に東西30m、南北17m狭い空間がある。さらに屏風絵では、山里丸から鰐鉢池の水辺空間へ降りる石段や、台所丸からせり出した朱色の欄干が認められる。

1) 山里口

上山里丸東側の虎口は、山里丸の大手をなし、山里口と呼ばれている。その虎口は、東西30m、南北50mの範囲に、石垣・門・石段などが確認され、「二重

の喰い違い虎口」の複雑な形をとり、少なくとも5回の折れをもって上山里丸へと到達する。途中の野面石を主体とした石垣を細かく観察すると、中段から上段にかけて「鏡石」が多用されており、「見せる石垣」を意識している。また、城内唯一の希少な隅角部が良好に残存している（図12②）。上山里丸の曲輪内部は秀吉の遊興施設を示す構成であるが、複雑な虎口は極めて厳重な城郭としての構えを持つ。

2) 上山里丸

ア. 秀吉の居館

掘立柱建物、礎石建物・池状遺構、排水遺構、泉水遺構、玉石敷き、垣（堀）、土壇と掘立柱建物が確認されている。建物の前面に庭や池を配置し、風情のある趣を彷彿させる。曲輪の南東部では、1棟の建物と渡り廊下とその北面に池などの施設がある。建物①3.8m（4間）×4m（4間）、建物②2.7m×4m（4間）、建物③1.8m～2.1m×12m（北12間、南9間）に玉石敷きが付随する。池の大きさは5.2m×4.0m、深さ0.3mで、池の石組と配水施設があり、多量の陶磁器が出土し、特に天目茶碗、小杯（美濃焼）、小皿（中国産）がある。池の中から小杯が出土しており、この区域の建物の性格を示している。「小規模な建物」は、「御茶屋」「池」「泉水遺構」「配水施設」は、「庭」と推定され、秀吉の日常生活に直接関わる遺構と考えられている（図12③）。また、これらの遺構は、後に、厚さ10cmの黄色粘土で覆い隠す際に、まつりが行われ、封じこめられていた様子が明らかになっている。

イ. 草庵茶室

山側から緩やかに傾斜した地形で、東西30m、南北17mの狭い空間にある。小穴の建物、飛石、玉石敷き、井戸、溝、池などが確認された（図12⑦）。景德鎮、朝鮮陶磁器、国産陶磁器に唐津（岸岳系）・瀬戸・美濃産も若干出土している。土壘脇から石段を下り、0.5m間隔で約15m続く飛石を伝っていき、東側を玉石敷き、北側を溝で区切られた狭い平坦面に小穴群が点在している。小穴が50ヶ程度あるが、いずれも深さは浅く、小さい穴である。そのうち、2.7m×2.35m+西側0.9×1.38m（「道籠」「床」と推定）、東側0.75m×2.35m（「縁」と推定）の建物が想定されている。また、玉石（直径1～2cm）敷きが東西1.5m、南北5.5



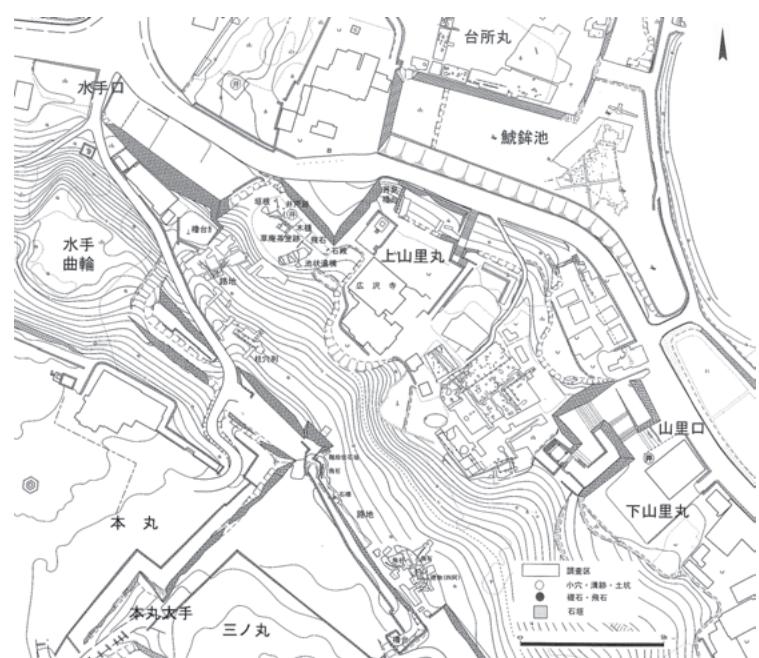
①肥前名護屋城図屏風（部分）



②山里口整備状況（北東から）



③上山里丸と本丸との位置関係（東から）



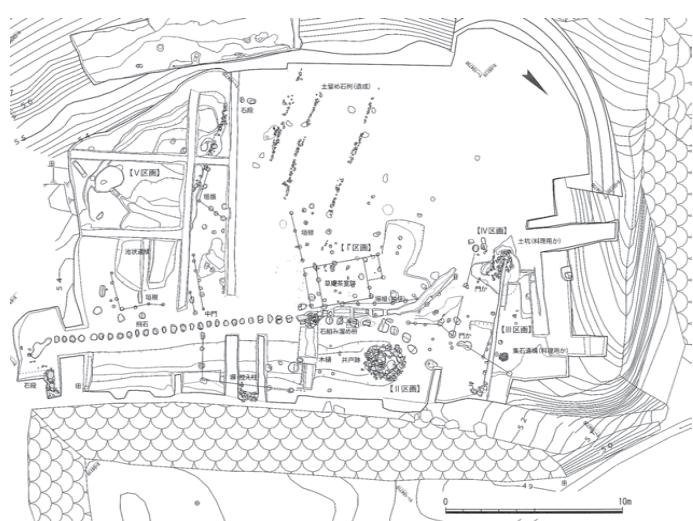
④遺構配置図



⑤石橋（下山里丸：三ノ丸北裾斜面）



⑥草庵茶室想像図（五島昌也氏原図）



⑦草庵茶室跡周辺発掘調査状況

図12 山里丸 配置図、調査状況等

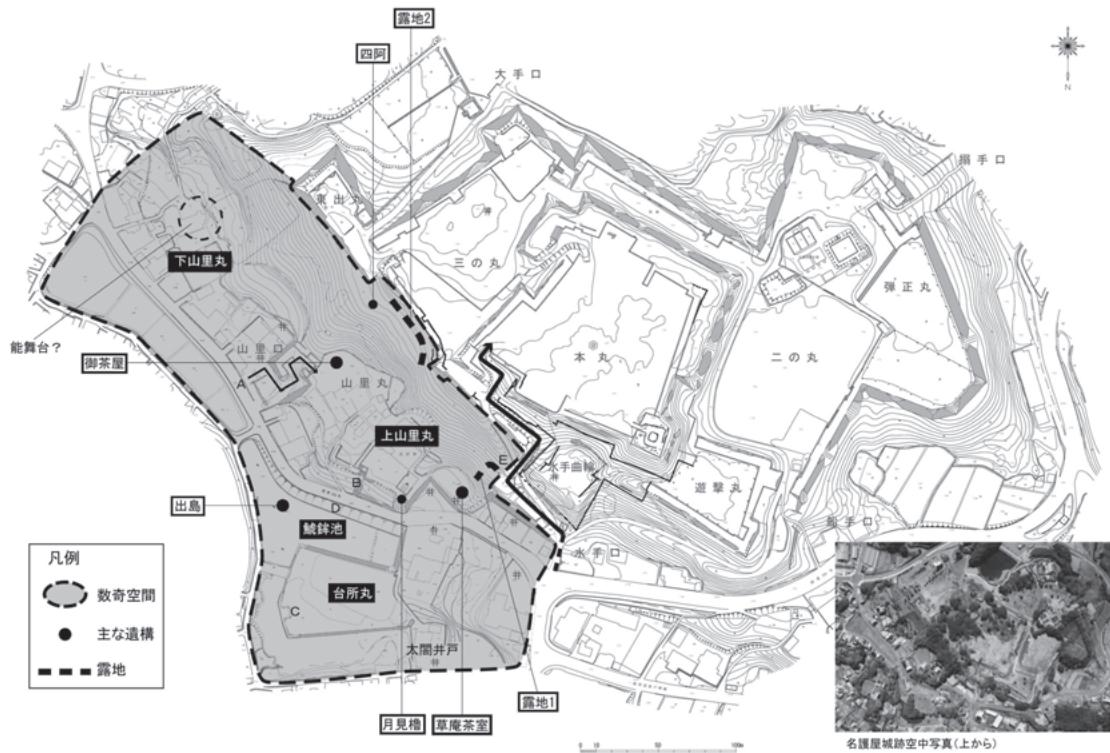


図13 肥前名護屋城の数寄空間

mの範囲に分布し、直径1.3mの井戸跡がある。さらに、西側には、幅3.5m×長さ10mの池が確認されている。

ウ. 山裾を伝う露地

三ノ丸北裾の斜面地では、幅1~1.2mの路地と飛石、石橋（図12⑤）、四阿（2m×3.3mの掘立柱建物跡）などが確認され、自然景観が良く残る山里丸法面にも、露地が予想外に良好に残っている。

3) 鮎鉢池と台所丸

水堀の幅は、現在、道路が拡幅されて不明ではあるが、その規模は東西300~400m、南北幅15~60mを測る。また、堀底は西側で標高35m、東側で標高30mと西側が高く、東側が低くなっていることがボーリング調査等で明らかになっている。また、発掘調査では、山里丸の北虎口の下から水堀の中央に向けて、半島状の「出島」を確認し、その内に柱穴群と礎石・井戸を確認している。また、台所丸からこの水堀へ下る石段などの通路からも「船着き場」の存在が推定され、城本来の防御としての水堀の機能よりも、むしろ、秀吉の居住空間として、総合的な遊興空間としての利用が推定される（図12④）。

(2) 山里丸の原風景=数寄空間

山里丸の周辺地形や茶室、露地を含めた「数寄空間」を想像してみると、山里の中に佇む草庵風の茶室が浮かび上がってくる。天下人秀吉の茶室として、また、千利休が追求してきた「佗び」・「さび」の世界を表した「草庵茶室」の遺構として初の発見例であり、豊臣秀吉が茶の湯においては、千利休が亡くなっていても、彼が求めていた茶の湯の心をなおも温め続けたことが推察される（図12⑥）。一方、秀吉はこの名護屋の地で、能に目覚め、日々没頭し、密かに稽古に励んだのもこの山里丸と伝える。天下人秀吉によって、山里丸や台所丸さらに水辺の空間である鮎鉢池を含んだ壮大な空間が統一された遊興空間として存在したのではないかと思われる。これまで進められてきた肥前名護屋城や諸将の陣屋における発掘調査の成果や屏風図・文献調査等をとおして、いにしえの「肥前名護屋城の数寄空間」を訪ね、体感することが可能になってきている（図13）。

【註】

- 1) 「肥前名護屋城図屏風」は、元禄元年（1688）伊勢亀山城主板倉重常が徳川綱吉に献上した1双の屏風の写しまたはその下絵とみられ、狩野派の絵師である狩野光信の作と考えられている。肥前名護屋城を中心に城下町や諸大名の陣屋をパノラマに描いている。特に名護屋城や陣屋の内部など克明に伝えてあり、名護屋城の本丸や山里丸、前田利家陣・徳川家康陣（別陣）などには藁葺の建物が描かれており、数寄屋と考えられる。現在、この屏風絵は佐賀県重要文化財となっている。
- 2) 『宗湛日記』天正二十年〔十一月十七日〕一太閤様ニナゴヤニテ、御會 山里ノ御座敷ヒラキナリ
- 3) 中村質「文禄・慶長の役城跡図集」佐賀県教育委員会、1985
- 4) 地元では「旗竿石」と呼ばれている自然石があり、その中央は直径30cm内外の孔が穿ってある。武谷和彦氏は80基の「旗竿石」を実見し、御手水鉢、蹲踞と捉えている。武谷和彦「いわゆる「旗竿石」について（補遺2）」『研究紀要17集』佐賀県立名護屋城博物館、2017
- 5) 『宗湛日記』〔文禄二十二年正月二十二日 太閤様 羽柴筑前殿ニ数寄屋ニ、始テ、御成ノ時、山ヲ切リヌキテ、路地ニシテ、被懸御目候也 其時御座敷ニテ、アソハシケルト也、深山ノ躰ナト御ランシヲラシテ、手水ノ所にアソハシテ、御座敷ニテ也〕とある。

【参考・引用文献】

- 1 内藤昌「肥前名護屋城図屏風の建築的考察」『国華』第915号、1968
- 2 佐賀県教育委員会『特別史跡 名護屋城跡並びに陣跡2』1983
- 3 佐賀県教育委員会『特別史跡 名護屋城跡並びに陣跡 古田織部陣跡発掘調査概報2』1992
- 4 佐賀県教育委員会『特別史跡「名護屋城跡並びに陣跡」－堀秀治陣跡－』1993
- 5 佐賀県教育委員会『特別史跡「名護屋城跡並びに陣跡」10－徳川家康別陣跡発掘調査概報－』1993
- 6 中村質ほか『特別史跡名護屋城跡並びに陣跡3 文禄・慶長の役城跡図集』佐賀県教育委員会、1985
- 7 鎮西町教育委員会『後田遺跡「文禄・慶長の役」にかかる陣跡の発掘調査』1983
- 8 鎮西町教育委員会『特別史跡 片桐且元陣跡 木村重隆陣跡』鎮西町文化財調査報告書第11集』1993
- 9 鎮西町教育委員会『特別史跡 松浦鎮信陣跡 細川忠興陣跡』鎮西町文化財調査報告書第15集』1998
- 10 名護屋城博物館『特別史跡「名護屋城跡並びに陣跡」

木下延俊陣跡・徳川家康別陣跡II 発掘調査概要報告書』

1994

- 11 吉本健一編『特別史跡「名護屋城跡並びに陣跡」前田利家陣跡 佐賀県立名護屋城博物館報告書第2集』佐賀県立名護屋城博物館、2008
- 12 武谷和彦編『肥前名護屋城と「天下人」秀吉の城』図録、佐賀県立名護屋城博物館、2009
- 13 名護屋城博物館『さまざまな大名陣屋のすがた 発掘された大名陣跡』2011
- 14 松尾法博「特別史跡名護屋城跡並びに陣跡の保存と活用－地域や博物館との連携－」『日本歴史』第754号、吉川弘文館、2011
- 15 松尾法博「肥前名護屋城の数寄空間を訪ねて～天下人と諸将が愛でた数寄と能の世界～ なごや歴史講座資料（平成24年12月16日）」2012
- 16 宮崎博司編『特別史跡「名護屋城跡並びに陣跡」名護屋城跡－山里丸I－ 佐賀県立名護屋城博物館調査報告書第9集』佐賀県立名護屋城博物館、2014
- 17 宮崎博司『肥前名護屋の庭園連遺構について 研究紀要第21集』佐賀県立名護屋城博物館、2015
- 18 高橋知奈津『戦国城館の庭園遺構 平成26年度庭園の歴史に関する研究会報告書』奈良文化財研究所、2015
- 19 名護屋城博物館『特別史跡「名護屋城跡並びに陣跡」発掘された大名陣跡－さまざまな大名陣屋のすがた－』2014

【図版出典】

- 図2 佐賀県重要文化財『肥前名護屋城図屏風』部分、佐賀県立名護屋城博物館蔵
- 図4～13 参考文献5、8、11、16、19の掲載図を転載、再編

表1 名護屋城関連年表

年月日	事項
天正13年（1585）	9月3日 秀吉、閑白に任せられ〔7月〕、一柳直末に明国征服の意図を伝える。（『9月3日付一柳直末宛羽柴秀吉朱印状』）
天正15年（1587）	5月8日 秀吉、九州を平定する。（『九州御動座記』）バテレン追放令を発する。（6月）（『松浦家文書』）
天正16年（1588）	2月25日 小早川隆景、筑前名島城の築城に着手する。（『宗湛日記』） 7月7日 秀吉、諸国百姓の武具の所持を禁ずる〔刀狩令〕（『天正16年7月日付豊臣秀吉朱印状』ほか）
天正17年（1589）	12月2日 秀吉、加藤清正に朝鮮出兵の準備を命ずる。（『清正記』）
天正18年（1590）	8月 秀吉、小田原北条氏を下し（7月5日）、奥州を平定する。〔全国統一〕（『浅野家文書』） 9月3日 秀吉、松浦鎮信に壱岐勝本城の築城を命ずる。（『9月3日付松浦鎮信宛豊臣秀吉朱印状』）
天正19年（1591）	9月16日 秀吉、明国出兵の時期を定めて、諸将に準備を促す。（『毛利家文書』） 10月10日 名護屋城の普請始まる。（『黒田家譜』ほか）
文禄元年（1592）	4月13日 文禄の役始まる。〔釜山上陸は12日〕（『西征日記』） 4月25日 秀吉、筑前深江より海路、肥前名護屋へ着陣する。（『有浦文書』） 5月16日 秀吉、朝鮮国漢城までの道中に宿泊所の普請を命じる。（『毛利家文書』） 5月28日 秀吉、大坂城より移設した黄金の茶室にて茶会を催す。（『宗湛日記』） 6月2日 秀吉、徳川家康や前田利家の諫言により渡海を延期する。（『中外経緯伝草稿』） 7月22日 秀吉、大政所の病気のために名護屋を発す。（『多聞院日記』） 7月25日 浅野長政、波多氏家臣有浦氏に名護屋城修築の用材を求める。（『有浦文書』） 8月2日 秀吉、大坂城へ帰る。（『大かうさまくんきのうち』） 8月11日 秀吉、伏見城を築城を命じる。（『大かうさまくんきのうち』） 10月1日 秀吉、再び肥前名護屋に出陣する。（『多聞院日記』） 11月12日 秀吉、山里丸に居を移す。（『大かうさまくんきのうち』） 11月17日 秀吉、山里丸の茶室開きに神屋宗湛を招く。（『宗湛日記』）
文禄2年（1593）	1月 秀吉、名護屋にて能の稽古を始める。（『甫庵太閤記』） 3月5日 秀吉、北政所に能を十番覚えたことを告げる。（『3月5日付北政所宛豊臣秀吉書状』） 4月9日 秀吉、名護屋城本丸にて能を催す。（『甫庵太閤記』） 5月1日 秀吉、波多三河守を改易し、その領地の代官に寺沢忠摩守広高を任命する。（『甫庵太閤記』） 5月15日 明の使節謝用梓・徐一貫ら名護屋に着く。（『小早川文書』） 5月19日 秀吉、名護屋城にて能楽を催す。（『大和田近江重清日記』） 6月9日 秀吉、明の使節を船遊びに招いてもてなす。（『甫庵太閤記』） 6月10日 秀吉、明の使節を名護屋城に招き、茶会を催す。（『甫庵太閤記』） 6月23日 秀吉、名護屋陣中の瓜畠にて諸大名を振売商人に仮装して興じる。（『大和田近江重清日記』） 6月28日 明の使節、名護屋を発し、朝鮮へ帰る。（『甫庵太閤記』） 8月3日 側室淀君、大坂城にて秀頼を生む。（『言経卿記』） 8月13日 秀吉、名護屋城二ノ丸で四座（觀世・金春・金剛・宝生）共演の能を催す。（『大和田近江重清日記』） 8月14日 秀吉、名護屋を發し大坂に帰る。（『甫庵太閤記』）
文禄4年（1595）	7月8日 秀吉、秀次から閑白・左大臣の官職を奪い高野山に追放し、聚楽第を破却する。（『言経卿記』）
慶長元年（1596）	7月13日 慶長の大地震によって伏見城の大天守が倒壊する。（『義演准后日記』） 9月2日 慶長の役始まる。（『家忠日記』） 12月19日 二十六聖人が長崎で処刑される。（『義演准后日記』）
慶長3年（1598）	3月15日 秀吉、醍醐寺にて花見を行う。（『大かうさまくんきのうち』） 8月18日 秀吉、伏見城にて没する。（『公卿補任』） 8月25日 徳川家康・前田利家ら、朝鮮半島の將兵に帰國を命じる。（『鍋島文書』） 12月10日 島津義弘、筑前博多に到着しこれより日本軍の帰国が終わる。（『征韓録』）
慶長5年（1600）	9月15日 関ヶ原の戦いがおこる。（『近衛家文書』ほか）
慶長7年（1602）	寺沢広高、唐津城築城を開始し、その際に名護屋城の建物等を移築したと伝えられる。（『松浦拾風土記』）
慶長7年（1603）	2月12日 徳川家康、征夷大將軍に任命られて、江戸に幕府を開く。（『公卿赴任』）
慶長7年（1607）	5月6日 回答兼刷還使が來訪し、日本と朝鮮国の国交が回復する。（『家忠日記』）
慶長19年（1614）	10月1日 大坂冬の陣が起きる。（『家忠日記』）
元和元年（1615）	5月8日 大坂夏の陣で、豊臣氏が滅びる。（『義演准后日記』） 6月13日 一国一城令が発せられる。（『細川家譜』）
元和3年（1617）	9月28日 朝鮮国回答兼刷還使、呼子に寄港する。（『東槎上日録』）
寛永14年（1637）	10月25日 島原の乱が起きる。翌年に乱が平定され、その後、名護屋城の石垣破却か。（『岸田家文書』）
寛永20年（1643）	5月17日 朝鮮通信使が名護屋へ寄港する。（『癸未東槎日記』）

※宮崎博司氏作製

参考文献 『太閤秀吉と名護屋城』 鎮西町史編纂委員会 鎮西町 平成5年

『史跡太閤記』 藤本光 新人物往来社 平成5年

『秀吉と文禄・慶長の役』 佐賀県立名護屋城博物館 平成19年

『肥前名護屋城と「天下人」秀吉の城』 佐賀県立名護屋城博物館 平成21年

『史料綜覧』 東京大学史料編纂所 東京大学出版会 昭和40年

表2 名護屋城跡並びに陣跡関連の庭園遺構一覧表

遺跡名	庭園位置	様式	庭遺構構成要素	関連する建物遺構	築造時期	大名（領地）	庭園発掘調査年度	備考
名護屋城跡	上山里丸 草庵茶室跡	露地	飛石・井戸・池状遺構・柵跡・溜柵・茶室跡・池底	草庵茶室跡	16C	豊臣秀吉	1997～2005	名護屋在陣 『宗湛日記』
名護屋城跡	上山里丸 御茶屋跡	池庭 露地	泉水・配水施設・玉石敷き・御茶屋跡・露地	御茶屋跡	16C	豊臣秀吉	1997～1999	名護屋在陣
名護屋城跡	山里丸斜面	露地	飛石・石橋・四阿	四阿	16C	豊臣秀吉	1997～2005	名護屋在陣
名護屋城跡	鯱鉢池 出島	池庭	出島・池	柱穴群・護岸	16C	豊臣秀吉	1997～2004	名護屋在陣
名護屋城跡	台所丸	池庭	船着き場・石段		16C	豊臣秀吉	2001	名護屋在陣
豊臣秀保陣跡	主郭	平庭	景石・玉石敷き・旗竿石	書院 御座の間・数寄屋	16C	豊臣秀保（大和）	1978	名護屋在陣 『宗湛日記』
古田織部陣跡	曲輪I	露地	石段・飛石		16C	古田重然（美濃）	1988～1990	名護屋在陣
木下延後陣跡	主郭	露地	飛石・雪隱・景石（自然岩盤）	敷石建物跡	16C	木下延後（播磨）	1993	名護屋在陣
前田利家陣跡	主郭 (館部)	池庭 茶庭	泉水・飛石・雪隱・旗竿石	大型掘立柱建物跡	16C	前田利家（加賀）	2003	名護屋在陣 『宗湛日記』
堀秀治陣跡	本曲輪 北西曲輪 北曲輪 東曲輪	露地	飛石・延石、景石（自然岩盤）・ 石段・旗竿石	茶室跡・能舞台跡	16C	堀秀治（越前）	1981～1987	名護屋在陣 『宗湛日記』に堀直政（家老）
松浦鎮信陣跡	曲輪	露地	飛石・玉石敷き		16C	松浦鎮信（肥前）	1998	朝鮮半島に渡海 『宗湛日記』に松浦隆信（父）
徳川家康別陣跡	曲輪II	露地	茶室跡・露地・玉石敷き	礎石建物	16C	徳川家康（武蔵）	1991～1998	名護屋在陣 『宗湛日記』
木村重隆陣跡	曲輪	露地	飛石・雪隱・玉石敷き	雪隱跡	16C	木村重隆（越前）	1990～1991	在陣→朝鮮半島に渡海
後田遺跡	主郭	露地	飛石・玉石敷き	建物跡	16C	陣主不明	1981～1982	不明陣跡（No.120陣跡）

庭園関係遺構一覧表 宮崎 2015・高橋 2015を参考に加筆・改変、『宗湛日記』に茶会の記述があるものを備考欄に記載。

表3 名護屋参陣諸侯将と陣跡

番号	陣跡名	城 地	知行高(方石)	軍役(人)	陣跡図上字名	番号	陣跡名	城 地	知行高(方石)	軍役(人)	陣跡図上字名	番号	參陣武将名	城 地	知行高(方石)	軍役(人)	陣跡図上字名	番号
城内	津野 長政 若狭 小浜	大隈 粟野	10,000 湯蓋 文七郎はい か八人	44	寺沢 広高 觀音寺堅珍	44	寺沢 広高 近江(津浦觀音寺等住持・代官)	45	45	45	草道石(ツベイシ)	88	筑紫 広門 筑後福島	1.8	900	三本松		
1	鳥津 義弘 越後 春日山	56.1 3.0	50,000 官尺(ツラシヤ)	1	46	No.46陣跡 水野 忠重 伊勢 神戸	46	47	47	48	大戸浦 小早川隆景 筑前 名島	90	90	90	2,000 (野本)	近江佐和山 (19.4)	I	
2	上杉 豊景 九鬼 嘉隆	志摩 鳥羽	1,500 11.3	1,500 5,000	春田 大平	47	48	49	50	51	丹後 富津 肥前 平戸 信濃 高島	91	91	92	1,500 赤松	結城 秀康 下締結城	I	
3	福島 正則	伊予 今治				49	50	51	52	52	30.7 11.0 (コボシキ)	93	93	94	1,500 赤松	義純 豊後府内	II	
4	加藤 清正	肥後 熊本	19.5	10,000	金烟	49	50	51	52	52	3,500 6.0 (コボシキ)	95	95	96	6,000 250 江迎	早川 長政 近江の内 (1.7)	II	
5	豊臣 秀保	大和 郡山	15,000		善にゅう (義入)	49	50	51	52	52	3,000 2.8 (カクスキ)	96	96	97	1,000 " "	毛利 秀賴 信濃飯田	I	
6	堀 秀治	越前 北ノ庄	6,000			50	51	52	53	53	50 垣ソエノ間	97	97	98	1,500 1,500 横岳	伊達 政宗 陸奥岩出沢 (51.5)	I	
7	前田 利家	加賀 金沢	8,000		第前町	50	51	52	53	53	50 垣ソエノ間	98	98	99	5,000 (地獄浜)	宗 義智 対馬 府中	III	
8	前田 行長	肥後 宇土	7,000	中魚見(見打棒)	51	52	53	54	54	51 片桐 且元	200 (垣添)	99	99	1,000 (地獄浜)	徳川家康別陣	I		
9	小西 行長	肥後 江戸	14.6	7,000	竹ノ丸	51	52	53	54	54	1.0 (垣添)	200 (垣添)	100	1,000 (弁天崎)	伊達 政宗 横岳	I		
10	黒田 長政	豊前 中津	12.0	5,000	蓼浦	51	52	53	54	54	1.0 (垣添)	200 (垣添)	100	1,000 (弁天崎)	毛利 秀賴 信濃飯田	I		
11	増田 長盛	近江 水口	15.0	1,000	波戸大平(鶴田)	51	52	53	54	54	8.0 (垣添)	200 (垣添)	100	1,000 (弁天崎)	伊達 政宗 横岳	I		
12	北条 氏盛	(34美濃守の子)			神田(コワダ)	55	56	57	58	58	1.0 (250)	200 (垣添)	101	1,000 (1.0)	No.101陣跡"			
13	生駒 親正	讃岐 高松	16.7	5,000	木村 重隆 片桐 貞隆	55	56	57	58	58	1.0 (250)	200 (垣添)	101	1,000 (2.0)	毛利 吉成 豊前小倉	III		
14	佐竹 義宣	常陸 水戸	3,000		波戸ノ郷	55	56	57	58	58	1.0 (250)	200 (垣添)	102	1,000 (5.0)	毛利 吉成 豊前小倉	III		
15	柏馬 義胤	陸奥 牛越			永田社	56	57	58	59	59	1.0 (250)	200 (垣添)	103	1,000 (5.0)	毛利 吉成 豊前小倉	III		
16	相模 萬葉	阿波 徳島	17.3	7,200	鳥ノ巣	56	57	58	59	59	1.0 (250)	200 (垣添)	104	1,000 (5.0)	毛利 吉成 豊前小倉	III		
17	蜂須賀家政	(上杉景勝の老臣)			治崎	56	57	58	59	59	1.0 (250)	200 (垣添)	105	1,000 (2.0)	毛利 吉成 豊前小倉	III		
18	前江 豊政	美濃 鳥取				61	62	63	64	64	1.0 (250)	200 (垣添)	106	1,000 (2.8)	毛利 吉成 豊前小倉	III		
19	織田 信秀	美濃 岐阜	1.0	300	小官只	61	62	63	64	64	1.0 (250)	200 (垣添)	107	1,000 (3.0)	吉川 広家 出雲 富田	II		
20	秋田 実季	出羽 鶴田	5.0			61	62	63	64	64	5.0 (250)	200 (垣添)	108	1,000 (4.2)	伊藤 盛景 吉川領内	II		
21	高橋 直次	筑後 三池	1.8	800	小崎	61	62	63	64	64	1.2 (250)	200 (垣添)	109	1,000 (2.0)	伊藤 盛景 下總占河	II		
22	宇都宮国輔	下野 宇都宮	18.0	300	鉢尾	61	62	63	64	64	1.2 (250)	200 (垣添)	110	1,000 (1.2)	伊藤 盛景 下總占河	II		
23	西田 広定	伊勢 裕出			(200) 姫ヶ坂(間立ノ辻)	66	67	68	69	69	1.0 (250)	200 (垣添)	111	1,000 (1.2)	伊藤 盛景 下總占河	II		
24	織田 秀信	美濃 岐阜	(16.0)	8,000	間立	66	67	68	69	69	1.0 (250)	200 (垣添)	112	1,000 (1.2)	伊藤 盛景 下總占河	II		
25	伊藤 盛景	美濃 大垣	(3.0)	1,000	中尾	69	70	71	72	72	1.0 (250)	200 (垣添)	113	1,000 (1.2)	伊藤 盛景 下總占河	II		
26	真田 昌幸	信濃 上田	3.8	500	"	69	70	71	72	72	1.0 (250)	200 (垣添)	114	1,000 (1.2)	伊藤 盛景 下總占河	II		
27	氏家 行玄	伊勢 桑名	2.2	150	中野	69	70	71	72	72	1.0 (250)	200 (垣添)	115	1,000 (1.2)	伊藤 盛景 下總占河	II		
28	氏家 行繼				250	69	70	71	72	72	1.0 (250)	200 (垣添)	116	1,000 (1.2)	伊藤 盛景 下總占河	II		
29	足利 義昭		1.0	500		73	74	75	76	76	1.0 (250)	200 (垣添)	117	1,000 (1.2)	伊藤 盛景 下總占河	II		
30	蒲生 氏郷	会津 若松	91.9	2,000	白崎	73	74	75	76	76	1.0 (250)	200 (垣添)	118	1,000 (1.2)	伊藤 盛景 下總占河	II		
31	加藤 光泰	甲斐 甲府	24.0	1,000	神田堂	73	74	75	76	76	1.0 (250)	200 (垣添)	119	1,000 (1.2)	伊藤 盛景 下總占河	II		
32	長東 正家		500		井園	73	74	75	76	76	1.0 (250)	200 (垣添)	120	1,000 (1.2)	伊藤 盛景 下總占河	II		
33	山中 長俊	(秀吉の祐築一代宮)			井園	77	78	79	80	80	1.0 (250)	200 (垣添)	121	1,000 (1.2)	伊藤 盛景 下總占河	II		
34	北条 氏規	河内	(0.7)	(200)	寺ヶ坂	77	78	79	80	80	1.0 (250)	200 (垣添)	122	1,000 (1.2)	伊藤 盛景 下總占河	II		
35	村上 義明	加賀	6.6	2,000	周防谷	77	78	79	80	80	1.0 (250)	200 (垣添)	123	1,000 (1.2)	伊藤 盛景 下總占河	II		
36	御牧 景則	(秀吉馬廻)				77	78	79	80	80	1.0 (250)	200 (垣添)	124	1,000 (1.2)	伊藤 盛景 下總占河	II		
37	富田 一白		650		宮口	78	79	80	81	81	1.0 (250)	200 (垣添)	125	1,000 (1.2)	伊藤 盛景 下總占河	II		
38	大野 治長	(秀吉馬廻)			辻ノ上	82	82	83	83	83	1.0 (250)	200 (垣添)	126	1,000 (1.2)	伊藤 盛景 下總占河	II		
39	本多 忠勝	上総 小多喜	10.0		北方両	82	82	83	83	83	1.0 (250)	200 (垣添)	127	1,000 (1.2)	伊藤 盛景 下總占河	II		
40	大久保忠世	相模 小田原	4.5			83	83	84	84	84	1.0 (250)	200 (垣添)	128	1,000 (1.2)	伊藤 盛景 下總占河	II		
41	木下 吉隆	(秀吉馬廻)	1,500頃		陣場	85	85	86	86	86	1.0 (250)	200 (垣添)	129	1,000 (1.2)	伊藤 盛景 下總占河	II		
42	名古屋経述	名古屋経述				87	87	88	88	88	1.0 (250)	200 (垣添)	130	1,000 (1.2)	真田 信之 (No.26の長男)	II		
43	No.43陣跡					87	87	88	88	88	1.0 (250)	200 (垣添)	131	1,000 (1.2)	日影 (ヒカケ) (No.26の長男)	II		

【凡例】文禄1年3月～2年5月。作成にあたり、陣跡番号は図14の図中の番号に対応し、アミ掛けの罫は特別史跡指定跡。作成にあたり、中村質氏の比定(特別史跡名護屋城跡並びに近江守山城跡)と、佐賀県教育委員会(佐賀県教育委員会 1985)を基準とし、その後の踏査、発掘調査・成果、「佐賀県、遠江の城跡」(佐賀県教育委員会 2010改定)により補遺した。



図14 名護屋城跡・陣跡配置図